

2010年度 第1回 入学試験問題

国 語

(50分)

<注 意>

1. 開始のチャイムがなるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 問題は1ページから28ページに印刷されています。
3. 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
4. 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

中央大学附属中学校

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

よく日、教室にはいろいろとした雅彰^{まさあき}は、だれかに名をよばれて立ちどまった。ふりかえると、多田^{ただしろう}嗣郎^{しろう}がかばんをかかえて立っていた。

「あつたよ。ほく、見つけたんだ。」

「なにを？」

「きまつてるじゃないか、船、ふね。」

「へえ、どこで？」

「大川と埋め立て地のさかいに水門があるの知ってる？ あそこにひっかかってたんだ。やっぱりロープのむすびめがほどけたのかねえ。ボートもいっしょにくつついてたよ。」

嗣郎は、得意げにしゃべっている。

「そう、でも、見つかったてよかったねえ。」

嗣郎は、雅彰がそれほどうれしそうな顔をしないので、ちょっとひょうしぬけしたらしい。①いくぶん声の調子をおとした。「ほんとに世話をやかせるよ。きょうの放課後、いつてみない？ まだ水門のところにつないであるから。修理するんなら、小屋のそばまでひっぱってきといたほうがいいと思うんだけど……」

A

嗣郎は、やっと、雅彰が船への興味をなくしたらしいことに気づいた。それでも、

B

そういつて、自分の教室のほうにもどっていった。雅彰は嗣郎のうしろすがたを、ちよつとのあいだながめてから、一組の教室に

中央大学附属(1回)

はいった。

じつのところ、あの船が行方不明になったとき、雅彰は心のなかでひと安心したものだった。これで、あのあぶなっかしい船ともつきあわなくてすむ。そう思った。

日曜日の午後、船ばたからころげおちたときのきずは、もうほとんどなおっていたけれど、あのときのショックは、いまでもおぼえていた。あんなこわい思いをするのは、もうこりこりだった。

雅彰は水泳がにがてだった。背の立たないところで泳げる自信がない。だから、みんなが船をつくろうといいだしたときは、内心、ああ、いやだなあと思った。だけど、だからといって、みんながいっしょうけんめいつくっているなかで、邦俊みたいに、知らん顔していられるほどの勇氣はなかった。

まして、仲のよい誠史がさそえば、雅彰としてはことわれなかった。

やれやれ。また船づくりか——。雅彰は、うんざりしてしまった。それでも船が見つかったことをだまっているのは、なんとなく嗣郎にわるいような気がして、雅彰は誠史に報告した。

「C」

誠史の反応は、それだけだった。

「シロちゃん、船なおすんだって、はりきってたよ。」

これにも、誠史は、ただふうんといってうなずいただけだった。雅彰はちょっと意外だった。

船が行方不明になったとき、あれだけ残念がっていただけに、もつとよろこぶかと思っていたのだ。

「あしたから、作業開始だろ。」

「D」

誠史のそつけないことばに、雅彰は内心ほっとした。誠史が船づくりの仲間からはずれるのなら、雅彰だっていっしょにやめるこ

とができそうだった。

土曜日の午後、埋め立て地には、いつもの顔がそろった。

小屋のまえの岸壁に、行方不明になっていたジャンボ・シーホース号と、ボートがつながれている。嗣郎がひとりで水門のところからひっぱってきたらしい。

一週間、海水につかりっぱなしになっていた船は、びっくりするほどみすぼらしくなっていた。船体は、こわれた右の舷側をわずかに海面にだして、あとは水中にしずんでしまっている。船の浮力というより、材料の浮力で、ようやく水面に顔をだしているといった状態だった。

「E」

船づくりにはいちばんハッスルしていた勇も、沈没船同様の船体を見たとき、あつさり②さじを投げてしまった。

「あああ、一か月苦勞して、ばかみちゃった。」

「おれただけで大きな船つくろうってのが、やっぱりむりでしたねえ。」

③誠史と勇の会話をききながら、嗣郎がたすけをもとめるように雅彰をふりかえった。雅彰は、そつと目をそらして邦俊を見た。邦俊は、いつものとおり、にやにやわらいながら、誠史と勇の会話をきいていた。

嗣郎には、わけがわからなかった。つい一週間まえまで、あれだけむちゅうになつてつくっていた船ではないか。それをたった一週間やそこらで、こうもあつさり投げだしてしまうのか。

もちろん、ジャンボ・シーホース号の構造には、嗣郎も最初から疑問を持っていた。べつに父ちゃんになつたわけではないけれど、大きな材木をつかう場合には、それなりのやり方がある。まして船のような乗り物なら、よほどじょうぶにつくらないと役にたないだろうと、いうことは予想がつく。ただ木と木をくぎでとめて、形をととのえればできあがるものではない。

でも、失敗すれば、それを教訓にして、新しくつくりなおせばいい。勇たちもたぶんそうするだろう。嗣郎はそうかんがえていた。

中央大学附属(一回)

ところが勇たちときたら、自分たちのつくりかけた船を目のまえにしなから、あっさり船づくりを投げだすという。

嗣郎は、よほど、その理由を問いつめてやろうかと思った。だが、嗣郎にはそれをする勇氣はなかった。そんなことをすれば、たちまちここにあそびにくるなといわれそうな気がした。④ 嗣郎には、それがなによりこわかった。

嗣郎にとって、勇や誠史や雅彰や邦俊は、なにか人種のちがう雲の上の人間たちのような気がする。そんな子どもたちと、こうしていっしょにすごさせてもらうだけでも、感謝しなくてはならないのだ。

子どもには〈できる子〉と〈だめな子〉の二種類があると、嗣郎は確信していた。

嗣郎は小学校に入学以来、いや、そのずっとまえ、ひよつとしたら生まれたときから、〈だめな子〉だった。〈だめな子〉は、どんなに努力しても〈できる子〉にはなれないし、大きくなれば〈だめなおとな〉になるにちがいない。父ちゃんも母ちゃんも、やつぱり小さいとき〈だめな子〉だったから、大きくなっても〈だめなおとな〉にしかたなかったのだ。

だめな子にも、いろんなランクがあつて、たとえばけんかのつよいやつとか、人をわらわせるのがうまいやつは、けっこうたのしくやつていける。だけど、なんの特技も、根性も持ちあわせていないやつは、だめな子の仲間うちからもこづきまわされ、ばかにされる。そんな最低の子にできることといえば、せいぜい自分よりいくらかましな連中におべっかをつかつて、子分にしてもらうほかなかった。

嗣郎は、いままでそうやって、なんとか生きてきた。

そんな嗣郎が、まったくひよんなことから、〈できる子〉のなかでも最高のグループと、つきあってもらえるようになったのだ。

あれは三月だったか四月だったか、家のちかくで自転車にのつた大道邦俊に出あった。邦俊とはクラスもいっしょだったから、あえば口ぐらいはきく。

「どこにいくの？」

嗣郎の質問に、邦俊は、

「埋め立て地。」

と、みじかくこたえた。嗣郎はそれまで、町はずれの埋め立て地にいったことがなかったし、邦俊がなぜそんなところに行くのか、多少興味があつた。だから、ほんのあいさつがわりに、

「いっしょにいい？」

と、たのんでみた。邦俊は、意外とあっさりうなずいた。嗣郎も、まさかそこが育英塾にかよう子どもたちのひそかなたまり場とは思つてもみなかった。だから、すぐにかえろうとした。しよせん自分とは人種のちがう連中といっしょにあそんだって、ろくなことはない。

⑤ 案の定、連中は嗣郎のことをうさんくさい目で見た。だがふしぎに、面とむかつて「かえれ」というやつはいなかった。

やつぱり〈できる子〉は、ちがうな。嗣郎はいったんは感心したけれど、じきに連中の本心がわかった。

連中はいわないのではなくて、いえないのだ。〈できる子〉という人種は、みずから手をよこしてよわい者をいじめたり、いやなやつをしめだしたりするのがにがてらしい。まして、あいてが人種のちがう〈だめな子〉とわかれば、おうようにふるまうか、でなかったら、まるで無視してしまう。それしかできないのだ。

嗣郎は、ずうずうしくかまえることにした。他人の顔をうかがって行動することにはなれていたので、けつして⑥ ぼろをださないようにして、いつのまにか埋め立て地の小屋にすることを黙認させることに成功した。

しかし、いくら〈できる子〉とつきあっても、埋め立て地を一步出れば、嗣郎はやはり〈だめな子〉でしかなかった。学校でも家でも、そしてだめな子の仲間うちでも、そのようにあつかわれた。

だけど、埋め立て地にかようようになってから、嗣郎はそんな連中を、ひそかにばかにできるようになった。

「なにいつてやがる。こっちは育英塾にかよつてるエリートとつきあつてるんだぞ。」

そう、心のなかで毒づいてやることができた。

中央大学附属(1回)

船づくりは、埋め立て地の小屋での嗣郎を、いま一歩、連中のなかへくいこませる絶好のチャンスだった。いままで必死で四人の顔色をうかがい、おべっかをつかつて、なんとか仲間に入れてもらっていたのが、船をつくるうちに、いつのまにか嗣郎を連中と対等にしてしまったのだ。

こんなにあつさりと自分が、〈できる子〉と対等につきあえるなんて、嗣郎は思ってもいなかった。のこぎりのつかい方がうまいとか、かなづちのあつかい方をこころえているとか、たったそれだけのことで、育英塾にかよっているほどのエリートが、嗣郎のことをみとめてくれるとは思ってもよらなかった。

嗣郎は、うれしかった。だからこそ、父ちゃんの大工道具まで持ちだして、一心に船をつくったのだ。

嗣郎は、この一か月のあいだにつくりあげた⑦自分のポジションが、あの船と同様、ずぶずぶと海中にしみかけているのを感じた。

「じゃあ、いこうか。」

⑧〈できる子〉たちが、そういつて歩きだした。嗣郎はだまって防波堤のそばに立ちつくす。

「じゃあね。」

⑨〈できる子〉のひとりが嗣郎をふりかえる。

ちくしょう！ 嗣郎は心のなかでさげびながら、せいっぱいの笑顔をつくり、手をふつてこたえる。

【問1】 本文に関する次の説明文を読み、後の(1)・(2)の間に答えなさい。

この話には、約 a という期間にわたって、b に集まって船をつくっている、小学六年生の五人の少年が登場する。

五人のうち c 人は、同じ塾に通う仲間だった。しかし、少年たちが作っていた船は、この d もの間、行方不明となっていました。本文の始まりの場面は、ある e の朝の、学校のできごとである。

(1) 説明文中の a ～ e に当てはまる言葉を次の中から選び、それぞれ (ア) ～ (シ) の記号で答えなさい。

- | | | | |
|-------|--------|---------|---------|
| (ア) 二 | (イ) 学校 | (ウ) 一週間 | (エ) 金曜日 |
| (オ) 三 | (カ) 小屋 | (キ) 一か月 | (ク) 土曜日 |
| (ケ) 四 | (コ) 水門 | (サ) 一年間 | (シ) 日曜日 |

(2) 説明文中の「小学六年生の五人の少年」とは、誠史・雅彰・嗣郎・勇・邦俊のことです。それぞれの人物の説明としてふさわしいものを次の中から選び、(ア) ～ (キ) の記号で答えなさい。

- (ア) 作っていた船に思い入れがあったのに、なぜかやる気をなくしてしまっている。
- (イ) 船づくりに対して、他の少年に同調することもなく、手伝うこともしないでいた。
- (ウ) 校内一の優等生で、船づくりがうまくいかないのを知って、助言をしにやってきた。
- (エ) 大工の息子で、道具のあつかい方がうまいため、船づくりの時にはおおいに活躍する。
- (オ) 船づくりにはいやな思いを抱いているが、友だちのさそいを断れず、しかたなく手伝っている。
- (カ) もともとは、船づくりに対して一番意欲があったが、見つかった船のすがたにがっかりしている。
- (キ) ケンカばかりしている乱暴者で、いつか船を乗っ取ろうと考えるが、今は船づくりを手伝っている。

【問2】

A

E

に当てはまるものを次の中から選び、それぞれ(A)～(オ)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号は1度しか使えないものとします。

- (ア) これじゃあ、なおしようがないなあ。
- (イ) さあ、ぼくは、どうするかわかんない。
- (ウ) ぼく、きょう用事があるから……。ごめんね。
- (エ) ふうん、水門のところにひっかかっていたのか。
- (オ) あしたはくるんだろ。みんなでわるいところなおせば、のれるようになるよ。

【問3】

①「いくぶん声の調子をおとした」とありますが、この時の嗣郎しろうの行動や気持ちの説明として、もっとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 自分の話に興奮して思わず得意げな態度を取ってしまったのに、雅彰まさあきはいやな顔もしないで聞いてくれた。そこで嗣郎は安心して、落ち着きを取りもどした態度で話を続けている。
- (イ) 自分の話を聞いて雅彰が当然喜ぶものと思っていたのに、雅彰の反応に手ごたえがなかったので嗣郎は少しがっかりした。それでも雅彰の興味をひくように嗣郎は話を続けようとしている。
- (ウ) 雅彰が望んでいたことを代わりにやってあげたのに、雅彰は礼を言うそぶりを見せなかった。だから嗣郎はいら立ちを感じたものの、自分から始めた話とはかく最後までしようとしている。
- (エ) 雅彰がおもしろいと感じるようにわざと盛り上げた調子で話しているのに、雅彰の心には届かないようだった。そのため嗣郎はあせりを覚えて、ますます勢いをつけて話そうとしている。

【問4】

②「さじを投げて」——⑥「ぼろをださない」とありますが、「さじを投げる」「ぼろを出す」という語句の意味として適当なものをそれぞれ選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

② さじを投げる

- (ア) 力のあるものに、逆らわずしたがうこと。
- (イ) 思いがけないことが、実現してしまうこと。
- (ウ) 物事がうまくいくみこみがないため、見放すこと。
- (エ) 少しばかりのたすけや努力では、ききめがないこと。

⑥ ぼろをだす

- (ア) 困っているときにさらに不運が重なること。
- (イ) 都合の悪いことが明らかになってしまうこと。
- (ウ) 相手の悪口に対して同じように言いかえすこと。
- (エ) 目立つことをしてまわりの人からにくまれること。

【問5】——③「誠史と勇の会話をききながら、嗣郎がたすけをもとめるように雅彰をふりかえった。雅彰は、そつと目をそらして邦俊を見た。邦俊は、いつものとおり、にやにやわらいながら、誠史と勇の会話をきいていた。」とありますが、これに関する次の説明文を読み、1～6について適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

誠史と勇は、船づくりをあきらめる発言をしていた。

嗣郎にとって

1

- (ア) 船づくりは、父から教えられた技術を試すこと
- (イ) 船づくりは、自分という人間が必要とされること
- (ウ) 船づくりは、みんなの友情の深さを確かめあうこと

であったため、嗣郎は

2

- (エ) 雅彰に、誠史たちの考えに賛成してほしいと願う
- (オ) 雅彰に、誠史たちの争いをやめさせてほしいと願う
- (カ) 雅彰に、誠史たちとちがう意見を言っしてほしいと願う

のだった。

しかし雅彰は、

3

- (キ) 嗣郎の思いを知りながら、その考えには賛成できない
- (ク) 嗣郎が自分に何を求めているのか、知ろうともしない
- (ケ) 嗣郎に対する同情から、みんなの意見に同意できない

のだった。だからといって、

雅彰は、

4

- (コ) 嗣郎の言葉を心の底から信用することはできない
- (サ) 嗣郎の思いを代弁する勇気を持つことはできない
- (シ) 嗣郎の願いをはっきりとことわることもできない

ため、嗣郎の視線から逃れて邦俊に目を向ける。

一方の邦俊は

5

- (ス) もともと船づくりに対してしか興味を示していなかった
- (セ) そもそも船づくりに関心が無いような態度を取っていた
- (ソ) だんだん船づくりを行うことがめんどろになっていった

ので、

6

- (タ) これで解放されると安心して喜んでいたのであった
- (チ) その場の混乱をただおもしろがっているだけだった
- (ツ) 船を自分のものにしてしまおうと考えているのだった

【問6】——④「嗣郎しろうには、それがなによりこわかった」とありますが、この時の嗣郎の思いの説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) これまで友人はいなかった嗣郎だが、「埋め立て地」で〈できる子〉たちと出会うことで、心の底から親しくつきあえる友人を得ることができた。しかし「埋め立て地」という場所を失えば、たがいにバラバラになってつながりもとだえてしまうと考え、嗣郎はそれをおそれていた。

(イ) 家の仕事の手伝いに追われていた嗣郎にとって、「埋め立て地」で仲間と遊ぶことは、生まれて初めて持つことのできた自分だけの時間だった。しかし「埋め立て地」を出れば、いつか休み間もなくはたらく〈だめなおとな〉になってしまうのではないかと考え、嗣郎はそれをおそれていた。

(ウ) 自分のことをもっとも〈だめな子〉であると考えていた嗣郎は、「埋め立て地」の仲間に入ることによって自分は〈だめな子〉の中でも最低の子ではないと思えるようになっていった。しかし「埋め立て地」に行けなくなれば、自分の位置は元にもどってしまふと思い、嗣郎はそれをおそれていた。

(エ) 世の中には〈できる子〉と〈だめな子〉の二種類があると考えていた嗣郎は、「埋め立て地」で〈できる子〉たちと遊ぶことで、人間に区別なんて無いのだと考えるようになっていった。しかし「埋め立て地」の外では区別がつけられて〈できる子〉たちとは遊べなくなるので、嗣郎はそれをおそれていた。

【問7】——⑤「案の定、連中は嗣郎しろうのことをうさんくさい目で見た」とありますが、嗣郎は「連中」と自分がどのような関係にあると感じていますか。もっとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 「連中」にとってみれば、自分はとりたてて注目すべき存在でもないのに、その世界に入りこもうとしても、やはり「連中」にはなんの反応もない、と嗣郎は感じている。

(イ) 「連中」にとってみれば、自分は生きる世界がちがう存在であるため、仲間に入ろうとしても、やはり「連中」からはどことなくあやしまれている、と嗣郎は感じている。

(ウ) 「連中」にとってみれば、自分は他の少年たちにはできないことができる、おもしろくない存在であるため、やはり「連中」はうちとけようとはしない、と嗣郎は感じている。

(エ) 「連中」にとってみれば、自分はグループに加わる資格を持たない存在なのに、その輪の中に入ることが許されたので、やはり「連中」の態度は疑わしい、と嗣郎は感じている。

【問8】——⑦「自分のポジション」について、次の説明文の a・b にあてはまる内容を、それぞれ10字～15字で本文中より抜き出さない。なお、句読点やカッコも1字と数えます。

嗣郎は、「埋め立て地」に通うようになる以前は、a という生き方をしていた。しかし、「埋め立て地」で船をつくるようになってからは、b という立場を手に入れることができたのだった。その立場を嗣郎は「自分のポジション」と呼んでいるのである。

【問9】本文中の⑧の場面の説明として、もっとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 四人のうちのだれかが嗣郎^{しろう}に別れのあいさつをした時、嗣郎の方は船づくりが中止になってしまったという事実を受け止めきれず、ぼう然としていた。そしてみんながその場を立ち去っていく時には、あいさつを返す気持ちになれないほどの怒りを感じている。

(イ) 四人のうちのだれかが嗣郎の方をふり返った時は、四人ともすでに歩きだして嗣郎からはなれてしまっていた。そのため嗣郎は、自分に声をかけたのがだれなのかはつきり見わけることができず、だれに答えていいのか分からなくて、困ってしまっている。

(ウ) 四人の少年たちがみんなで嗣郎を置いて去っていくとしたので、嗣郎は自分がまたひとりぼっちになってしまっているのではないかと不安になってしまった。そこで嗣郎の方から別れのあいさつをすることによって、みんなの気持ちをつなぎとめようとしている。

(エ) 四人の少年たちが嗣郎を置いて立ち去っていくとしたので、嗣郎はみんなとの間にこえられないへだたりを感じてしまった。そして自分に声をかけたのがだれであっても、しよせんみんなは自分とちがう側の人間なのだと思い、悲しみやいらだちを感じている。

【問10】——⑨「ちくしょう！」

嗣郎^{しろう}は心のなかでさけびながら、せいっぱいの笑顔をつくり、手をふってこたえる。」とあります。

すが、これに関する次の説明文を読み、[a]～[g]に当てはまる言葉を後から選び、それぞれ(ア)～(シ)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号は1度しか使えないものとします。

失敗してもそれを教訓にもう一度船を作り直そう、と考える嗣郎にとって、他の少年たちが船づくりをあきらめようとすることは、[a] ことだった。

嗣郎は自分が他の〈だめな子〉よりも [b] と強く思いこんでいた。そんな嗣郎は周囲からも注目される〈できる子〉たちのそばに近づいたことで、他の〈だめな子〉よりも自分が [c] と感じるようになるが、もちろんそれは嗣郎がほんとうの意味で自分を認めたことにはならない。それが、船づくりが始まったことで、嗣郎は他の少年たちと [d] を結べるようになり、ようやく嗣郎は自分の [e] を感じられるようになった。だから嗣郎にとって船づくりはなくてはならないことだが、他の少年たちにとっては嗣郎と違って、船づくりは簡単に [f] ことだった。嗣郎は、あっさり「埋め立て地」を去っていく〈できる子〉たちを複雑な思いで見送ったのだろうと考えられる。

嗣郎の心の中の叫びには、さまざまな苦い気持ちが重なっている。それでも嗣郎は、表面的には、〈できる子〉たちに対して [g] を取らなくてはならず、嗣郎はそんな自分にも腹を立てていると考えられる。

- | | | | |
|-----------|------------|------------|------------|
| (ア) 対等な関係 | (イ) 親しげな態度 | (ウ) ふつうである | (エ) 手放している |
| (オ) 批判の姿勢 | (カ) 悲しみの表情 | (キ) おとっている | (ク) 納得できない |
| (ケ) 尊大な性格 | (コ) 存在する意味 | (サ) すぐれている | (シ) 興味が持てる |

II 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

「故郷ではおやじさん、なにやってんの？」

定食屋のおじさんは、カウンターの中から彼に聞きました。四八〇円の豚肉のシヨウガ焼き定食を食べながら、彼はこう答えました。

「なにも、していない」

パプアニューギニアから来た彼は、当時、国費留学生として工学部の大学院に在籍していました。そしてときどき、大学の近くにある小さな定食屋で食事をするうちに、店のおじさんともことを交わすようになったのできことです。

それは、一九八〇年代前半。留学生の父親がなにもやっていないとは、にわかに信じがたいことでした。そしておじさんは続けました。

「なにもしていないって言ったって、どうやって食ってんの？」

ややストレートすぎる聞き方ではありますが、横にいたわたしもぜひ聞きたい質問だったのです。

すると彼は、こう答えました。

「木の実を採って食べてる」

① 迫力のある答えでした。高度経済成長期の都市部で育ったわたしだけではなく、一九八〇年代の日本人の中にこんな返答ができる人はほとんどいなかったと思います。

「食べている」とは、「食生活を支えている」すなわち「生活の糧」を指しています。わたしたちが暮らしている日本では、都市はもちろん、農村などにおいても、② 自然の中から食べ物を採集する食生活を主としている人はほとんどいないのではないのでしょうか。

① 自然から食べ物を採取する機会は、せいぜい山菜採りとか、釣りなど。それらは、食べるものを採るためというより、むしろ行為そのものを楽しむ「レジャー」と位置づけるのが③ 自然です。そのプラスαとして手に入れた物を食べる。レジャーである「採集」行為は、それ自体が食生活や命を支えるものにはなり得ません。

たとえば、いくら魚釣りが好きだといっても、「今日一匹も魚が釣れなかったら食べるものがない」などという切羽詰まった状況の人などいるでしょうか？ 山菜採りやキノコ狩りにしても、「食べたらず死ぬかもしれない」という心配はあっても、「採れなかったら一家が飢える」という危機と④ チョクメンしているのでしょうか？

わたしたちは、おなががすいたら食べ物を買うことができます。自分で採ったり、栽培したりしなくても、他の人が作った食材や料理を買って食べられるのですから、採れなくてもなんとかなります。彼とおじさんの、あの短い会話が忘れられないのは、発展途上の国の人に対する一種の珍しさや「未開」といったイメージではなく、「木の実を採って食べている」と言ったその⑤ ハイゴに、⑥ 彼らの「実力」を感じたからでした。買うという行為なしにコンスタントに食べ物を調達し自分や家族を生かすことができ、安全な食べ物かどうかを見分ける力もあり、食べ物となる植物が来年もその翌年も、同じように実るような食べ方を知っている……。

ただ素朴で珍しいという以上に、彼の家族の生活は、自分の力で食べ物を手にし、⑦ 自然を理解する力があり、命を守る力も持っているという、「生命」の迫力が存在していました。同時にわたしは、自分の中の「未開」と⑧ 対峙せずにはいられませんでした。

③ こう考えると、自分の中の「未開のありか」は食べ物だけではないことに気づきます。家の作り方、衣服の作り方、最近では料理の仕方を知らなくても大丈夫。どれも、「ほかの人」がやってくれするという社会のシステムがあるからです。木の実を自分で採って食べる彼らとの違いは⑨ レキゼン。ひと言で言うと、便利なわけです。

そのシステムが、いかにわたしたちの暮らしを便利にしているのかということなど、当たり前すぎて実感できなくなっているほどです。水は蛇口をひねれば好きなだけ出てきます。暗くなればスイッチ一つで明るく灯すことができ、寒ければ暖房、暑ければ冷

房。暮らしを支えている「便利」は、数え上げたらきりがありません。

しかし、多くの人や技術に支えられているとはいえ、自分の手を使ってしなければならないこともたくさんあります。まったくにもせずに、食べ物が目の前に現れたり、家の中が片づいたり、健康を^dタモったり、毎日^eセイケツな服が着られるわけでは決してありません。食料はスーパーなどで手に入りますが、買い物に出かけて荷物を家まで運ばなければならないように、生活を整えるのはわたしたち自身です。

家事には時間も手間もかかりますし、しかも、毎日しなければならぬことです。今の暮らしが、人類史上例をみない便利さに囲まれているとはいえ、それは、大昔に比べれば楽になったということであって、毎日の生活実感をいちいち昔の人と比べたりはしません。だからこそ思うのです。「ああ、Aがあつたら……」と。

「全自動洗濯機」が発売されたのは、一九六五年のことでした。そう聞くと、「えっ、そんなに昔のことかなあ」と思います。わたしの実感では、周りの人たちが全自動洗濯機を使うという話を聞くようになったのは、一九九〇年ごろからと記憶しています。

普及率の数字がその記憶を裏付けてくれます。一九八六年の全自動洗濯機の普及率は、一八％。発売から二〇年たっても二〇％に届いていませんでした。それが五〇％を超えたのは、さらに一〇年後の一九九六年のことで、現在(二〇〇六年)では、八〇％を超えています。

全自動洗濯機を買い、はじめて使ったときは、「世の中にBがあるのか」とばかりに感動しました。ただの「自動」ではなく「全自動」ですから。洗濯槽と脱水槽が分かれていたそれまでの二槽式洗濯機とついつい比較してしまいます。二槽式洗濯機では、洗濯槽で洗い、脱水槽に移して脱水し、すすぎのためにふたたび洗濯槽へと、数分ごとに洗濯物を行き来させなければなりません。放っておくものなら、洗濯物はいつまでも石けん液の中をゆらゆらと漂っているだけです。これでは洗濯になりません。水道の栓の開け閉めも自分で管理しなければなりませんから、洗濯の間うっかり洗濯機のそばを離れることもできません。

それに比べて、なんと言っても全自動です。洗濯物を放り込んで洗剤を入れ、スイッチをセットすれば、次に洗濯機のそばに来るのは洗いがった合図のあと。数十分は、別のことに集中できます。全自動の底力に感心するとともに、洗濯中の時間が有効に使えて、うれしかったものでした。

かつて「自動」は生活における技術の進歩を象徴するキーワードとして、無条件に輝いていました。

自動ドア、自動販売機、自動巻き腕時計、自動変速装置、自動改札機、自動現金支払機……。最近では、C「自動」と言わずとも、自動式の機械が増えています。オフィスビルなどでよく見かけるのは、利用頻度の低いトイレや廊下、エスカレーターなどで、人を察知すると「自動的」に明かりがついたり、作動したりする装置。自動は、わかりやすい技術の成果としてわたしたちの手間を減らすことに貢献し、これらを受け入れたわたしたちは、ひとりで動く機械にちよつと未来的なイメージと先進的な優越感を感じていました。その「自動」の代表選手として登場した全自動洗濯機は、家事に大いに貢献してくれました。

ところが……、その感動も、ありがたみもつかの間のことだったのです。

「そこまでやってくれるのなら、もつともつと楽をしたい」

全自動といっても、スイッチを入れ洗濯が終了すればそれで洗濯が完結するわけではありません。洗濯物を干し、乾いた洗濯物を取り込むという手間をめんどろと感ずるようになっていきました。「いつそのこと、たまたまタンスにしまつてくれたら……。だつて全自動なんだから……」などと、乾いた洗濯物を見るたびに思うようになりました。いささか極端な望みとは思いつつも、さらなる「便利」を求めるのは自然なことです。わたしは、二槽式洗濯機で洗濯槽と脱水槽の間で洗濯物を往復させたことなど、D忘れていました。最近では、干すところまでやってくれる乾燥機能付きの洗濯機も出てきましたが、この便利さもやがてあたりまえのものになってしまうのでしょうか。

E 勝手なものです。でもこれは、人間が持っている「便利さ」に対する共通の心の動きなのかもしれません。ある家電メーカーの開発者は、新製品のセールスポイントとして取り扱いやメンテナンスが簡単であることを強調すると、ユーザーからは

現在のわたしたちが趣味として行っていることの中には、昔の人たちが生活のための生業として行っていたことが少なくありません。釣りやキャンプ、カヌーなどのアウトドア・レジャー、キノコ狩り、木の実拾い、日曜大工、陶芸や板金なども生活するために必須の作業。その中から環境を整えたり道具を作る技術が生み出されました。縫い物や編み物やパッチワークは、寒さや危険から身を守る衣服を作るのに必要でした。

⑥「アウトドア・レジャー」ということばがあるのは、世界中でも限られた国だけだそうです。アウトドアを「レジャー」として位置づけることができるのは、あまりにも便利さが進んでしまっていることを表しています。そして同時に、生活に手間をかけたたり自分で工夫したりするのは楽しいことなのだと教えてくれているようにも思います。

もともと便利にと「多くの自動化」を求めても、やがてそのありがたみが薄れたり、味気なさを感じることもあります。自動化して楽をしたいというのも生活や未来を作っていくことのひとつですが、自動だけじゃつまらない、と考えるのも、未来のひとつです。また、便利さをお金で買うのもひとつの選択ですが、できるだけ多くの工程を自分の手で行うこともまた、創造的で楽しい仕事です。

* 対峙……二つのものが向き合って動かないこと。ここでは、向き合うこと。にらみ合うこと。

* 憧憬……あこがれ。

* 愕然……ひどく驚く様子。

【問1】本文中の――(a)～(e)のカタカナを漢字に改めなさい。

- (a) チョクメン (b) ハイゴ (c) レキゼン (d) タモつたり (e) セイケツ

【問2】――①「迫力のある答えでした」とありますが、これに関する次の説明文の [a] [d] に当てはまる語として適当なものを、後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ものを、後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

「おやじさん、なにやってんの？」という定食屋のおじさんの質問は、留学生の父親の [a] が何かを問うものです。それに対する留学生の答えは、「なんにも、していない」でした。その答えを聞いて、「なんにもしていないって言ったって、どうやって食ってんの？」と、おじさんが問い返すのは、[a] がなければ、収入がないはずだし、収入がなければ、[b]を立てていけないはずだと、おじさんは考えるからです。おじさんの「どうやって食ってんの？」という言葉には、「どうやって [b] を立てているのか」という意味が含まれています。

ところが、「どうやって食ってんの？」という問いに対する留学生の答えは、「木の実を採って食べてる」というものでした。留学生は、ふざけているわけではありません。留学生は、おじさんの質問を「どうやって [c] を得ているのか」という意味に解して、その問いかけに対して正直に答えたのです。

自分で木の実を採って、それを食べる。それは、留学生にとって当たり前な行いだったわけですが、おじさんにとっては、そうではありません。[c] を手に入れるには [d] が必要なんですと、おじさんは信じています。[d] がなければ、私たちは空腹に苦しむことになるはずなんです。そして、[d] を得るためには、私たちは [a] をしなければなりません。これが、おじさんの常識であり、筆者の常識でもあります。そんな常識の中に生きている筆者の「わたし」にとって、留学生の答えは、心に強くせまるものであり、「わたし」の常識をゆさぶるような力を持ったものだったのです。

- (ア) 地位 (イ) 幸福 (ウ) 仕事 (エ) 幸福
(オ) 商品 (カ) 生計 (キ) 食料 (ク) 金銭

【問3】——②「^{かれ}彼らの『実力』」とありますが、どういうことですか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 「彼ら」は、自然を傷つけてはならないと考え、自然の中にあるものには手をふれようとせず、ありのままに残そうとする。つましさを持っている、ということ。

(イ) 「彼ら」は、自然のもたらしめるものを恵みとしてとらえ、自然と共に生きてゆくためにどうすべきか考えて行動しようとする。たくましさを持っている、ということ。

(ウ) 「彼ら」は、自然の持つ強大な力を知っているため、自分たちの技術を向上させて自然の力を逆に利用しようとする、したたかさを持っている、ということ。

(エ) 「彼ら」は、自然の中でこそ自分の才能が試されると信じて、危険をかえりみずに自然の中に入りこもうとする、いさましさを持っている、ということ。

【問4】——③「こう考えると、自分の中の『未開のありか』は食べ物だけではないことに気づきます」とありますが、どういうことですか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 高度に複雑化した社会では分業化が進み、人びとはそれぞれの適性に応じて役割を分担している。だからこそ、自分が多くの人や技術に支えられていることを忘れてはならない、ということ。

(イ) 社会が経済的に発展するのにもなって、農作物の生産高はどんどん低くなってきている。その結果、日本という国においては、自給自足の生活がもはや困難になってしまった、ということ。

(ウ) 私たちの生活は豊かになり、便利な機械もたくさん登場した。けれど、機械が何でもやってくれるわけではないから、私たちは今も自分の手で多くのことをしなければならない、ということ。

(エ) 技術が進歩したことにより、私たちは生活の労苦からだんだんと解放されてきている。しかし、それとひきかえに、私たちは生きるための知恵や技術というものを失いつつある、ということ。

【問5】~~~~⑦⑧の「自然」の中で用法がちがうものを1つ選び、記号で答えなさい。

【問6】

A	・	B	・	F	・	G
---	---	---	---	---	---	---

に当てはまる語句として適当なものを次の中から選び、それぞれ(ア)

～(カ)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号は1度しか使えないものとします。

(ア) 生活の雑事を全部自動でやってくれる機械

(イ) 懐かしいけど不便な機械

(ウ) こんなに便利な機械

(エ) 環境にやさしい機械

(オ) ほんとに美しい機械

(カ) なんと便利な機械

【問7】

C	・	D	・	E
---	---	---	---	---

に当てはまる語として適当なものを次の中から選び、それぞれ(ア)～(オ)の記号

で答えなさい。ただし、同じ記号は1度しか使えないものとします。

(ア) なんと (イ) すらすら (ウ) すっかり (エ) かつちり (オ) わざわざ

【問8】——④「新しい機械を手に入れて感動と落胆を繰り返す」とありますが、その具体的事例として適当でないものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 全自動洗濯機が発売されたときは、洗濯をしている時間に別のことを行えるので、便利なものと思われたが、今やそれは日常生活の中に当たり前に存在する機械になってしまった。
- (イ) ダイヤル式の黒い電話が普及したときは、便利なものと思われていたが、携帯電話が普及した現在は、持ち運びができないうえ、通話機能しかない時代遅れのものと認識されている。
- (ウ) デジタルカメラは、今やとても人気がある商品だが、最近ではフィルムでしか出せない味わいが見直されて、フィルム式カメラの評価が高まっている。
- (エ) 新幹線の「こだま」は、かつて「夢の超特急」といわれ、スピードへのあこがれをかなえた列車であったが、今や人びとの心ひかれる対象ではなくなってしまった。

【問9】——⑤「自動の機械を求めたとしても、逆にすべてが自動になってしまうことの味気なさが生まれることもあります」とありますが、どうしてですか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 「便利」ということは、作業や行動において、〈速さ・簡単さ・安心感〉を人間にもたらすが、人間の創意工夫する能力をうばってしまい、生きている意味そのものが分からなくなってしまうから。
- (イ) 「便利」ということは、作業や行動において、〈省力化・安定性・容易さ〉を人間にもたらすが、人間の思考力や技術力の求められる余地が少なくて、おもしろさを感じられなくなってしまうから。
- (ウ) 「便利」ということは、作業や行動において、〈経済的な効果や生産性〉を人間にもたらすが、人間の生まれながらにして持っている性質に逆らう場合が多くあり、欲求不満な状態になってしまうから。

(エ) 「便利」ということは、作業や行動において、〈時間的なゆとりや精神的な安らぎ〉を人間にもたらすが、人間が努力してことをなしとげる気力をおとろえさせて、生活に活気がなくなってしまうから。

【問10】——⑥「アウトドア・レジャー」ということばがあるのは、世界中でも限られた国だけだそうです」とありますが、どうしてですか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 世界の多くの国では、野外における活動を安全で楽しくおこなうことができる施設や設備が、いまだに整っていないから。
- (イ) 先進国と呼ばれる国では、人間と自然の深いかかわりが科学的に証明され、野外での活動が必要であると再認識されたから。
- (ウ) 世界の多くの地域では、野外での活動とは生きていくために必要な仕事であり、休日に楽しく遊ぶものではなかったから。
- (エ) 工業化が進んだ地域では、環境破壊を防ぐため、野外での活動により自然を大切にすることを育てようとしているから。

【問11】筆者の考えとして適当なものを次の中から2つ選び、(ア) (イ) (カ) の記号で答えなさい。

(ア) さらなる便利さを求め続けたことにより、今の豊かな暮らしが成り立ったのである。だから、便利さを追い求めることで、現在よりもっと豊かな社会が実現できるのである。

(イ) わたしたちは、便利になったというありがたみをすぐに忘れてしまう。だから、昔の人の苦勞と今の自分たちの便利さとを比べて、進歩した文明に感謝することが重要である。

(ウ) わたしたちの社会は、かつて自分がやらなければならなかったことを、ほかの人や機械にまかせるシステムになっている。しかし、その便利さは当たり前すぎて実感することが難しい。

(エ) 便利な生活に安住してしまうと、人は努力をおこたるようになり、生命力がおとろえてしまうことが多い。そのため、日常生活の中でも、できるだけ身体や頭を使うよう努めなくてはならない。

(オ) 多くのことを機械にまかせ、便利な暮らしを求めていくのは、当然のことかもしれない。しかし、自ら物を育てたり作ったりすることは、わたしたちに、精神的に豊かな生活をもたらしてくれるのである。

(カ) 今の社会はあまりにも便利さを追求し過ぎた結果、人と人を取りまく世界との間のへだたりがますます大きくなってしまった。だから、わたしたちは、昔のような生活にすこしでももどろうと努力すべきである。

【出典】

【Ⅰ】 那須正幹『ぼくらは海へ』(偕成社、一九九二年) より

【Ⅱ】 佐倉統・古田ゆかり『おはようからおやすみまでの科学』(ちくまプリマー新書、二〇〇六年) より

国語

二〇一〇年度 第1回 解答用紙

I

問1

	a
	b
	c
	d
	e

(2)

誠史
雅彰
嗣郎
勇
邦俊

問2

A
B
C
D
E

問3

問4

②
⑥

問5

1
2
3
4
5
6

問6

問7

問8

a
b
c
d
e
f
g

問9

問10

a
b
c
d
e
f
g

II

問1

a
b
c
d
e

問2

a
b
c
d

問3

問4

問5

問6

A
B
F
G

問7

C
D
E

問8

問9

問10

問11

成績記入欄

受験番号

氏名